

# さいたま人権教育

2025年  
9月15日発行

No.464

さいたま人権教育 編集責任者 石川享助 発行 埼玉県人権教育研究協議会  
〒360-0037 埼玉県熊谷市筑波3丁目160番地2階 埼玉人権・同和センター内 Tel 090-2162-1613  
Eメールアドレス saijinkyou@kvj.biglobe.ne.jp

差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう  
狭山問題の本質をとらえ、自らの課題として、同和教育を確立しよう

## 夏期研究会の実践報告2

前号に続き8月5日と8月29日の夏期研究会で報告された二人の報告を紹介をします。

### 石川一雄さんの『灯』より 宮崎 晋さん

現在の自分に課していること、それは「人権教育」であると報告する。1年目は自分の学年で、翌年以降1～3年生すべての学年で人権の授業をする。ことし全学年に「狭山事件」の石川一雄さんの授業を行う。この授業に至る思いを出会いのなかで記す。

荒れる生徒を前にしても、何もできない日々が何年も続き、歯痒い思いを繰り返してきた。そういったどうしようもなく荒れる生徒を前に、「なんでおとなしくできないんだ」「なんでこの子たちにかまわなければいけないんだ」「犯罪を止めるのは学校じゃなく家庭だろ」など、さまざまな葛藤の日々が続くなかで、「荒れる」生徒を前に「生徒を想う」なんてことは詭弁じゃないのか。と感じてきた。でも、結局振り返れば、それは、彼らや彼女たちの”メッセージ”を真正面から受けきることができなかったことへの言い訳にしか過ぎない。「荒れている」ことが日常的になってくるとそういう考えも日常的になる。でも、そんな自分に違和感を感じていたことも事実である。どうしたら苦しい生徒と向き合えるのか。この葛藤から今の自分につながる4つの出会いを報告しています。

「初任で出会った教師や地域の温かさ」「なんで他人のためにこんなに真剣になれるのか」という埼玉人教の人たちとの出会い、3つめが、狭山を語ることによって生まれた生徒の素直な反応。「一雄さんに会えませんか」「どういう苦しみをかかえたのか知りたい」「なぜ、絶望のなかで生きる希望を見いだせるのか知りたい」と生徒たちは訪ね聞いていった。

生徒の授業後の思いと行動、自分の伝えたい根っこが何か問われたこと伝えています。

今年、全校生徒を前に語った「狭山を伝える」授業はかつてない緊張のなかでやりきったが、その緊張は「伝えたい根っこ」が何か自覚したからこそその緊張だったと話していました。

4つめが不登校傾向の強いYさんとの出会いである。修学旅行の参加の有無で家庭・本人その板挟みになる。金銭の問題もあるなか本人や家庭をこの行事につないでいく。そのつなぎは高校受験に実るが、家庭の事情で入学辞退となる。忸怩たる思いのなか卒業を送り出したYさんから、今年改めて「受験を考えている」と連絡を受ける。

『学び』に早いも遅いもない。獄中で文字を取り戻した一雄さんと重なる部分が少し見えた。学びに対する飢えを持っているのだと思う。第二の石川一雄さんを生んではいけない、自分のなかで反芻する。」と報告してくれた。

目の前の子どもたちの生活を取り巻く現実には複雑化多様化している。その現実であってもその子らがいただく願いや思いをつなぎ続ける取組があったからこそ、いまのYさんの笑顔が生まれた。Yさんの学びの深さと思いをつなげることの大事さを教えてくれる。

### 「春輝らしさによりそいながら」・その子の【生きがい】とそれぞれの【いっしょ】の芽を見つめて～8年間の特別支援学級の現場から～

鳥羽大河さん

子どもたちのその子の【生きがい】とそれぞれの【いっしょ】の芽を

ものづくりがはじまると声をかけても気づかない翔に「全く好きなことばかりして」と止めさせようとしていた私。「好きなことだから没頭していたんだ」と気づくことからはじまる。白い紙からの工作づくりでは2年連続でものづくりコンテストに入賞もする。算数の「直方体や立方体」ではその経験が遺憾なく発揮された。ものづくりがうまくいった日は交流クラスの給

食にできた作品をもっていった翔。「生きがい」が人との「つながり」を作った。

入学後、学校を休んでいた健吾を家庭訪問したとき、うれしさのあまりありを何匹も踏みつけてしまう、この出来事にどうすればいいか悩んだ出会い。「すみれとあり」の本を健吾が手にすることから観察が始まり、工作になったり絵になったりして学びを広げていく。スイミーの学習で、健吾は一人黒色のスイミーによりそった。またスイミーが食べられないように他の魚になって応援する健吾のつぶやき。交流クラスの体育で先生が「今日はスイミーをやります。」「さてだれかスイミーやりたい人いますか」「はい、ぼくスイミーやりたい！」健吾の声。健吾がスイミーになり、広い体育館の海を大きな魚になって悠々泳いだ。授業の後、健吾は「2の1で給食食べたい」と交流担任につぶやく。「みんなといたい」というその瞬間の和希の思いと交流担任が逃さないでつないだ、その大切さを報告する。

前任校で1年半家で過ごした雄二との出会い。「ぼく、これはちょっと苦手なんだよね。やりたくないの」学習が自分のイメージと違うと大きな壁となって立ち上がる。クラスの翔が大好きなともだちになる。「あつ森」の辞書を持ってたてわり遊びに行くと、趣味が合う友だちとも出会う。大人数のたくさんの方が苦手な雄二にとって、「交流はハードルが高いものだったように思えた」と記す。交流クラスの掃除につなげ、雄二の心の奥底に「交流に行ってみよう」というエネルギーをずっとずっと見守ってきた。お楽しみ会の日、交流クラスの友だち連れられて4の2に参加してくる。「心が整う準備期間が必要である。じっくり考える時間と自分の居場所が学校には必要なのです」と報告しています。

「春輝らしさによりそいながら(略)」  
『『すみっこにいる子にきちんと目を向けてね』地域のばあばのつぶやきが脳裏に浮かび、『すみっこ』を作りだしているのはなんなのか』と、自答する。「それは学校や社会で見がちな『能力』による見方も一つの原因となっている気がしてならない。出会ってきた子どもたちの【いっしょに】の声、子どもたちが動いた【いっしょに】の行動は、【ともに生きたい】という切実な願いである。同時に子どもたちは訴えていた『これが、僕・わたしの【生きがい】だよ』と。【生きがい】が明らかに子どもたちと子どもたちをつなぐきっかけとなっていた」と記す。

「子どもは観念で見てはだめ、発見で見なきゃ」「地域と学校が手をつなげば子どもがもっともっとかしこくなるよ」この言葉は鳥羽さんが地域に足を運び続け、その地域の祖父母たちから学んだこと、「学校という狭い枠の中だけで子どもたちを見て、子どもたちを地域から切り離れた存在として捉えていた私の立ち位置に気づかせてくれた」と報告してきました。その

報告者が、「なかよし学級にどうやったら入れるの」「なかよし学級って何をするとおもしろいの」と、特別支援学級を受け持って今まで全く聞けなかった子どもの【つぶやき】に出会い、そこから実践に取り組んできました。その8年間をまとめてくれました。

「子どもはね、観念で見てはだめ。発見で見なきゃ」子どもたちの【生きがい】も、【発見】がなければ見えなかったことかもしれない。どこかで、私の考えを引き留めてくれるのは地域のじいじとばあば。教えてもらったあの時の言葉とまなざしが今の原動力となっている。子どもたちの【いっしょに】の背中を後押ししていきたい」と記した。(石川)

宮崎さんと鳥羽さんの報告は、今年の第76回全国人権・同和教育研究大会で埼玉からの代表報告になります。

## 部落問題学習をつくる

前号で、「よみがえった黒べえ」の授業づくりが報告されました。2023年度、総会時「ワークブックづくり構想」を論議してきました。今後を展望して紹介します。

### 「ワークブックづくりの構想」

#### 第1部「ともに生きる社会を目指して(差別の現実)に学ぶ」

- 1 日常生活にある偏見・差別への気づき
- 2 条約・憲法・法律・条例や社会の制度で保障される権利・子どもの権利条約ほか
- 3 被差別の経験者に聞く(部落差別・障がい者差別・性的マイノリティーほか)
- 4 自分の差別に気付いて生き方を改めた経験
- 5 差別と闘って生きる人々の姿(部落出身者障がい者・性的マイノリティー・犯罪被害者犯罪加害者・琉球民族・アイヌ民族・在日外国人)

#### 第2部「部落差別やいろいろな差別をなくすために」

- 1 江戸時代以前の差別
- 2 江戸時代の身分制度
- 3 江戸時代に起きた差別事象、事件と反差別の闘い
- 4 江戸時代の部落の人々の暮らし
- 5 明治時代になってからの差別
- 6 明治時代以降社会的に形成された差別と歴史
- 7 明治時代以降の部落の人たちの闘い
- 8 軍国主義の抵抗と収斂の歴史
- 9 戦争加害の責任について
- 10 戦後の部落解放運動と同和教育(部落解放運動の再建と反差別平和の闘い)
- 11 新たな反差別の運動(映画やインターネットなどメディアリテラシーを求めて)

#### 第3部 対話を通して親から子へ部落問題をつなぐ(知って差別をなくすことの大切さ)

- 1 親と話し合う
- 2 みんなで話し合う (石川)